

タヌ子救出作戦

hirokokawasaki45

タヌ子救出作戦

平成3年師走のある朝、私と愛犬メリー号は勢いよく隣地の空き地に飛び出した。息は真っ白で、息すらも凍ってしまいそうなそんな寒さだった。いつもの通り十字路を左折したところだった。

「ニャー。ニャー。ニャー。」

子猫の泣き声がきこえる。我が家の隣地とその北側の家の空き地にダンボール箱が置いてある。私はメリーと共に歩み寄った。ダンボール箱に「ひろってやってください」と下手くそな字で書いてある。箱の中にはまあなんと醜い子猫がいるではないか。黒い猫で顔に筋で黄色が入っていて背中も黒色でまだらの色で私の手の中に入る位の小さな子猫である。私はどうしたものかと少しためらいながらダンボール箱から後ずさりし事の成り行きを見守った。「ニャー。ニャー」子猫はなくばかり。3、4分経過し、その空地の隣地のおばさんが登場してダンボール箱をつかみ近所の家のおばさんと合流し、

「やあね。猫なんか捨てて。」

と言い猫をゴミ捨て場に捨てるにはいかないか。「ひどい」私はそう思いおばさんが立ち去ってから子猫を助け出しにいった。しかし子猫を拾ったものの我が家にはメリーを飼っている。動物嫌いな私の母親は、怒るに違いない。そう思いながら帰宅し、子猫を家の中に入れた。「でもまズい。」そう思った私は心ならずも子猫を隣の空き地においてきてしまったのだ。

時が過ぎること3時間。私は我が家の応接間に入った。すると、隣の弟の部屋から子猫の泣き声がするではないか。あの子猫だ。弟の部屋に入って、

「どうしたのその猫。」

としらじらしく尋ねた。

「何だか知らないけど家に迷い込んできたんだ。」

弟はそう言い子猫を炬燵の中に入れて遊んでいる。私は子猫をどうしたらよいものか弟と話合った。とにかく猫を飼う許可を両親にもらおう。しかしだがこの猫は可愛くない。はたして家で飼っていいと言ってくれるかどうか。不安は募るばかりだった。

当時小学校の教師をしていた母が学校から帰宅した。

「ダメ！そんなもの。うちはただでさえお金がないっていうのに猫を飼うなんてとんでもない。メリーもいるしそれに世話が大変でしょ。捨ててらっしゃい。」

母はいつものごとくすごい剣幕でギャンギャン怒鳴る。私は母の勢いに負け子猫をまた捨てるに行った。しかし私は家に戻ってからも「猫を飼う飼う」と言い張った。そして20分としないうちにまた子猫を拾ってきて家に上げた。私は弟と一緒に猫を飼うんだと強く主張して母と対立した。そして9時近くになって父が帰ってきた。母はプリプリ怒りながら、

「お父さん裕子が子猫を拾ってきて飼うってってるよ。」

と言った。そして父の、

「飼ってやりゃいいがや。」

というツルの一声で私と弟は大喜びして子猫を飼うことになった。母は少々不満げであったが子

猫はこうして我が家の一員となった。名前を何と付ける?私は父に聴いた。父は手のひらに入りそうな子猫を挙げて、

「お前はタヌキだね。そうだ名前をタヌキにしよう。」

弟もそれがいいと云わんがばかりに、

「そうしよう。そうしよう。」

と同意した。せっかく私が拾ってきたのに名前はタヌキか。もうちょっと可愛い名前がよかった。私は少し不服だった。でも子猫を家で飼ってもいいといわれただけ幸せだった。そしてそれ以来子猫をタヌとかタヌ子(メスだった)と呼ぶようになった。

そして暫くたってからのことだった。タヌ子は、家から外に遊びにでかけたまま夜8時を過ぎても戻らない。一体どうしたのだろう。と不審に思い焦りは募るばかり。NHKの大河ドラマが終わろうとしているころ父に向かって、

「お父さんタヌ子が帰ってこない。探しに行く。」

と告げると非情な母は、

「タヌ子は帰りたいときに帰って来る。探しに行かんでいい。」

と言い張る。

「そんなこと言ったて」

と私は言いながらも家から飛び出し、

「タヌ子や～タヌタヌ。」

大声を張り上げてまた交差点を左折すると、

「ニャー!ニャー!ニャー!」

ああ。タヌ子の声だ。タヌ子が張り叫んばかりに泣いている。急いでタヌ子の声の聞こえる方へと駆けだした。なんとまあタヌ子はM邸の2階屋根の上でしどろもどろしながら泣き叫んでいるではないか。

「タヌちゃん。降りてらっしゃい。降りてらっしゃい。」

片手で大きく何度か手を上げ下に振りながらそう言った。だがタヌ子は屋根から降りて行こうと2、3歩降りてはまた上って行き「ニャー!ニャー!」と叫びながらその行為を繰り返すばかりである。私は、急いで家へ戻って父を呼びに行った。はしごを持ってきて急いでM邸の半2階にはしごをかけて父は上った。M邸は侵入者が入ると防犯ベルが鳴り響きかなりの音がするのだがインターホンを何回押しても反応がなかったので留守だと思い、なによりもこの非常時にそんなことはかまっていられない。

「おーい。タヌ。降りて来い。」

父はそう言い、私も

「タヌちゃん。降りてらっしゃい!」

と何回も大声を張り上げそうだった。近所の人たちも随分集まってきた。緊迫した時間が流れた。二、三十分経過したところ一筋の明るい兆候が現れた。タヌ子がトコトコ屋根の上から父のもとへ降りて来るではないか。そしてタヌ子は父がつかまえ、ウワッと近所の人たちは歓声を挙げた。私はタヌ子を左腕の中にかかえて、

「バカ。降りられないのに屋根の上に上るんじゃない。」

右手でタヌ子の頭をコツンと小突いてやった。タヌ子は少し震えながらも安心したかのように目を細めていた。なぜタヌ子がM邸の2階に上がったか原因ははっきりしない。だがそんなことがあって幾日か経過したときのことだった。

タヌ子がかゆがって足や手で体中をかいているのだ。タヌ子の体をよく見ると蚤がいっぱい這っているではないか。父が猫の蚤取りがうまいので、

「お父さんタヌ子の体に蚤がいっぱいいる。とってやって。」

私はそう言って台所の石油ストーブの前に座り、父もあぐらをかいてタヌ子を膝の上の上にのせて、一匹ずつ蚤をとっていった。スルスルと走っていく蚤に父は右手の親指の甲でタヌ子の皮膚の上に爪をたてる。そして左指の爪の甲をあわせて蚤をプチッと潰すのだ。そして一匹ずつ蚤を潰していく。当然タヌ子は父に爪を立てられるので

痛がって父の手に噛みつくのだが、父は「じっとしとれ。」と猫に言って根気よく蚤を潰していった。蚤は時折タヌ子の体から1メートルほど高く飛び上がる。蚤を潰しながら父は、

「蚤っていうものにもなあうんこ場ってゆうものがあるところには蚤はよりつかないんだ。」

そういった。なるほどフンがいっぱいあるところには蚤はほとんどいない。父はさすが生物の教師であるだけあって蚤の生態までくわしいのか。私はひどく感心したものだ。父は初日は50匹ほど蚤をとって次の日に51匹ほど蚤をとった。

「101匹ワンちゃんならぬ101匹ノミコちゃんだ。」

父はそう言っていかにも満足気だった。

年が明けてテレビを見ていたら埼玉県の手賀原市という所に住んでいるペルちゃんと言う猫が16万円拾ってきたというニュースが流れた。

「タヌ子も100万位拾ってこい。」

タヌ子の頭をなでながら父はそう言って私たちは笑い家族のそんな暖かさがあった。

そして両親とあまりに厳格すぎて、映画を見に行くことすら許可しない両親と折り合いの悪い私は東京で暮らすことになるのだが、田舎者で東京なんかと思う母はしきりに私に「かえってらっしゃい」と連絡してくるのだった。母の手紙であるとき、「タヌ子もさみしがっていますよ」と書いてあって、あんな家二度と帰りたくないと思った私もその時ばかりは飛んで家に帰りたくなった。

数日程時が過ぎ私は東京から実家に戻った。普通の猫よりは小柄だが、タヌ子はすっかり大きくなって少しオドオドした猫になっていた。そしてまたまたタヌ子の珍事件である。弟がメリーの散歩をしているとタヌ子が後ろからついてきたのである。弟が空き地から空き地に移動しようとする時タヌ子が「ニャー。ニャー。」と鳴く。弟が何かと思い振り返ると、なんとタヌ子はうんこをしているのである。「ニャー。(待ってくれ)ニャー。(待ってくれ。)」と言っていたのである。

「タヌキのやつ。」

弟は愉快気に言ったものだった。

そしてそんなある日のことだった。。タヌ子が外へ遊びに行き、応接間の出入り口に戻ってきた。なんと口に体長が15センチほどのヘビを加えているのである。ヘビは必死になって逃げようとして弟の靴の中に入りこんだ。

「バカー。タヌ。おまえヘビなんか連れてきて。」

そういって弟は困惑していた。タヌ子は、（私はこうゆうものが捕まえてこられるのですよ。）と自慢したらしいのである。タヌ子は逃走したヘビを手でちょっと押さえて止めて何度もその行為を繰り返していた。そのうちヘビはニョロニョロしながら玄関と応接間のしきりとエアコンの室外機が合わさっている隙間に入り込み隠れてしまった。母は嫌がって父にヘビを探させたがヘビは見つからなかった。一カ月ほどして母が庭の掃除をしていたら庭石の上にあのヘビがどくろをまいて座っていた。母は悲鳴を上げて腰を抜かしてしまった。

そしてそんなある日のことタヌ子は鎖に繋がれているメリーに向かって両手を揃えて「ウーッ。」と唸り声をあげ身構えて、「ウニャ。」と言って爪を立てて右手でメリーの顔をめがけてひっかいた。メリーは「キューン。」と言って顔を背け、またタヌ子は反対の手で同じことをしてメリーは嫌がる。それを見ていた私は、

「コラー。タヌ。メリーをいじめるな！」

とこぶしをあげて叱った。

それから私はまた家をでることになって、タヌ子の様子を知るには電話のみとなってしまった。ある日、家に電話をかけたらタヌ子は体調が悪く吐き気をもようしていた。翌日タヌ子は母の布団の中で6年の生涯を閉じた。タヌ子の遺体はペットの合同火葬場でやかれた。

「お骨はどうしたの？」

私は母にたずねた。

「合同火葬場でひきとってくれた。」

「骨まで愛してやらなきゃ。」

私はそうつぶやいた。

完